

箸で伝えられること

中森葉月

「なぜお箸をきちんと持たなきゃいけないの。」

「食べられればなんだっていいじゃない。」

全国の小学生にお箸の知育教室を開いている、箸屋「兵左衛門」のブランド・文化事業部長の中道久次さんは、このような子どもたちの率直な疑問によくぶつかるという。

福井にその発祥を持つ兵左衛門は、子どもへの「箸育」に力を入れている。箸の歴史や正しい遣い方を教え、実際に材料の木から自分だけの箸をつくる箸作り体験まで、その内容は多岐にわたる。

正しいお箸の遣い方とは、まず鉛筆を握るように親指、人差し指、中指の3本で1本目の箸を軽く持つ。そして人差し指と親指で作った輪のなかにもう1本の箸を差し入れ、薬指でそれを支える。動かす時は、後から持った方の箸は固定したままで、上の方だけを縦方向に動かす。このような箸遣いを子どもたちは、両親や祖父母など、大人たちと食卓を囲みながら学んできた。美しい箸遣いを身につけることは、周囲を不愉快にさせないようにと他人を思い遣る心を養うことにもつながるといふ。そして食事の場は、箸遣いに限らず多くのことを大人から子どもへと伝える役割を果たしていた。

だから箸が美しく遣えるというのは、きちんと躰をする家庭に育ったというある種の証になり得る。私立小学校のなかには入学試験に、「お弁当の時間」を設けて箸遣いを審査の対象に含めることもあるようだ。

しかし最近では、びっくりするような箸の遣い方をしている子どもが少なくないと中道さんは指摘する。正しく箸を持てているのは十人いたら、三人くらいのものだという。

こうした美しい箸遣いは、どこかに定義が明文化されているというわけではなく、人と人との関わりの中で言い伝えられてきた伝統なのだ。つまり伝える人がいなくなれば、絶えてしまう「文化」なのである。それは兵左衛門の原点、福井県の伝統工芸「若狭塗」でも同じである。20年、30年と長くもつ箸を塗ることのできる職人は、片手で数えられるほどしかいないという。

兵左衛門の箸は、漢方薬の材料にも使われる漆で塗られている。漆は樹脂などと違って剥がれやすいけれど、塗り替えを行えばずっと長く使うことができる。一般的にそれぞれ自分専用の箸があることが一般的な日本人は、箸に特別な愛着を抱いている。だからこそマイ箸を持ち歩くというブームもすんなり受け入れられたのだろう。

今日はただ空腹を満たすためだけに食事をするのではなく、誰か大切な人に心を配りながら食べてみるのもいいかもしれない。いただきますと手を合わせ、きちんと箸を遣って食べる食事は、いつもよりずっと美味しく感じられることだろう。

編集後記

祖父母の家には私の茶碗、私のお箸が、それぞれ家族分用意されていました。訪ねるのはたまなのに、私のための食器をとっておいてくれているのが嬉しかった。一人暮らしを始めた現在は、実家に帰った時に同じ気持ちを味わいます。物理的距離は離れていても、心を近くに置いてくれる。そういう力が『私のお箸』には宿っているような気がします。